

(^_^)v 趣味に生きる (第30回) ~. ~. ~. ~. ~. ~.

山登りとカメラ

八木 靖 二

(がん研有明病院臨床検査センター 検体検査部)

◆生きる力を与えてくれる源

今の私にとって山登りは、趣味というより「生きる力を与えてくれる源」と思える程、山登りには畏敬の念を抱いています。山登りの魅力に目覚め、山登りを再開してから早 13 年が経ちました。体力・持久力のない私にとって、頂上までの道程はいつも決して楽ではありません。頂上直下の最後の上りはきつく、足が進まず、心拍数は限界を超え、息が詰まりそうになります。それでも「もう少しで頂上だ、弱音を吐くな」と、自分自身を励まし宥(なだ)めながら、一步一步頂上を目指します。正に自分との戦いです。それでも最後の力を振り絞って頂上に辿り着いた瞬間、達成感と同時に幸福感で満ち溢れます。何事も無かったかのように今までの苦労が一瞬にして吹き飛び、掛け替えのない至福の時が訪れます。天候に恵まれた時の頂上から眺める景色は格別で、しばし時を忘れます。山の神様が「頂上までよく頑張りました。ご褒美に素晴らしい景色をプレゼントします。」と祝福してくれているかのように！ 大きく深呼吸すれば新鮮な空気が体の隅々まで行き渡り、例えようもない心地よさに満たされ、体中が浄化されていくような気持ちになります。眼下に見下ろす山々と青い空、刻一刻と形を変えていく雲、まるで大空をキャンパスに山々の稜線と雲の造形、陽光とのコントラストが神秘的な光景を創り出しているかのようです。いつもこのような光景に出合えるとは限りませんが、一度味わってしまうと私と同じようにきつと病み付

きになることでしょう。

◆ニコン一眼レフカメラとの出会い

山登りとカメラは、今の私にとっては切っても切れない、言わば一心同体のようなものです。私にカメラの魅力を教えてくれたのは、北里衛生科学専門学校の同学年でした猿田さんです。猿田さんはクラスも違い 10 歳年上でしたが、同じ北海道出身ということで、私の方から声をお掛けし親しくさせて頂きました。猿田さんの提案で 3 年生の夏休みに富士山登山が計画され、7 名で行く予定でしたが、残念ながら私は食中毒を起こして 5 日ほど入院し参加することができませんでした。帰ってきた後、猿田さんの写真を見せていただき、余りの綺麗さに感激したのを覚えています。当時写真撮影についての知識は殆どありませんでしたが、写真を撮影したカメラがニコン一眼レフカメラ F2 フォトミック A であることが分かり、私の心の中には“綺麗な写真”イコール“ニコン一眼レフカメラ”という絶対の神話ができ上がり、欲しくて居ても立っても居られない気持ちになりました。しかし、当時高価なカメラを購入する余裕もなく、諦めざるを得ませんでした。こんな気持ちでしたので癌研病院に入職したその年の冬のボーナスで、ためらいもなく約 18 万円もした最新のニコン一眼レフカメラ F2 フォトミック AS 一式を購入しました(当時の給料は 10 万 5 千円)。形、重さ、感触、色、輝き、シャッター音、ファインダー等々、どれをとっても素晴らしく、



写真1 愛用のニコン F2 フォトミック AS を首から下げて(1985年頃の春、左が私)

すっかり虜になりました。嬉しくて嬉しくて毎日のように手に触り、暫くは枕元に置いて寝たほどです。写真1は、1985年頃の春、東京都一般検査研究班幹事仲良し4人組〔左から私、斉藤さん(東芝病院)、浦さん(同愛記念病院)、撮影者 島田さん(杏林大学病院)〕と、陣馬高原へハイキングに行ったときの1コマです。私は愛用のニコン F2 フォトミック AS を首からぶら下げて爽やかな顔?をしています。

カメラを購入してからは、写真を撮るのが好きになり、何処に出かけるにも必ずカメラを持参するようになりました。

この F2 フォトミック AS はフィルムカメラでしたが、8年程前からデジタルカメラに切替え、昨年よりニコン D800 デジタルカメラを使用しています。D800 は、性能もよく便利で申し分のないカメラですが、贅沢にも何か物足りなさを感じます。それは、フィルムカメラでは写真の状態をすぐに確認できませんでしたが、下山してからの現像の仕上がりを待つワクワク感が、何とも言えず楽しみだったからだと思います。

絵心のない私にとって、写真は自然をキャンパスに自由自在に切り取って持ち帰ることができる唯一の方法であり、出合った素晴らしい風景に何時でも再会することができます。気に入った写真を大きく引き伸ばして自分の部屋だけでなく家中に飾り、何時も眺められることが此の上もない喜びとなっています。

◆私は山登りが嫌いでした？

1996年にスイス旅行に行くまでは、「山登りが嫌い?」というより楽しいと感じることができず、私の性に合わないと思っていました。

最初に“山といえる山”に登ったのは、44年前の中学2年生の夏休みに入った1969年7月末だったと思います。その時の担任でした錦織先生から「アポイ岳に登りましょう。」というお誘いがあり、賛同した4名といっしょに登った記憶があります。しかし、曇り空で展望は望めず、達成感だけでそれ以上の感激はありませんでした。私は北海道日高郡新ひだか町三石出身で、アポイ岳の登山口には車で1時間ほどで行くことができました。アポイ岳は日高山脈襟裳(えりも)国定公園の特別保護区にあり、太平洋に面した標高810.6mの1,000mに満たない山ですが、現在「花の百名山(脚本家・作家 田中澄江が昭和55年に発表した随筆集)」として全国に名を馳せています。

2度目の山登りは、北海道の静内高校を卒業後、臨床検査技師になることを目指して埼玉県の上尾中央病院に就職し、2年目より夜学の北里衛生科学専門学院に通い始めた年の1975年6月頃だったと思います。山登りが趣味だった院長運転手の白石さんに誘われて同行しました。気晴らしになると思い、何処にある山かも確認もせず黙ってついて行きました。土曜日の夜11時頃に出発し、日曜日の3時頃登山口に到着後、仮眠して明け方5時ごろから登山を始めました。「簡単な山なので、すぐに頂上に着くよ。」と言われて登山を始めましたが、アポイ岳と違って最初から急な登山で、たちまち息が上がってしまいました。あれが頂上かと思って登山きいても次から次へと頂上らしき頂が現れ、結局本当の頂上に辿り着くまで4時間以上かかってしまいました。頂上に着いてその山が新潟県の県境にある平標山であることが分かりました。私にとってこんなにきつい山は初めてだったので、登山きいた達成感は一入(ひとしお)でしたが、曇り空で展望は望めず、やはりそれ以上の感激はありませんでした。

3度目の山登りは、北里衛生専門学院卒業後、癌研病院(現在がん研有明病院)に入職した年の1978年10月末だったと思います。輸血部の宇津さんに誘われ、3名で東京都で一番高い雲取山に登ることになりました。土曜日の仕事が終わった午後病院を出て、4時頃に登山口に到着し登り始めました。間もなく薄暗くなり、5時を過ぎた頃には真っ暗になってしまいましたが、月明りで思ったより明るく、ライトがなくても歩くことができました。ただ夜の山登りは初めての経験で、山小屋に着くまで正直不安でした。また、山小屋に泊まるのも初めての経験でした。山小屋は薪ストーブで暖かく雰囲気はよかったです。火が消えた夜中は寒くてよく眠れませんでした。夜が明けた日曜日に雲取山の頂上に到着して達成感はありませんでしたが、紅葉が終わった後でもあり、やはりそれ程の感激はありませんでした。

それ以来、山に登りたいという気持ちが消え失せ、いくら山登りに誘われても心が動くことはありませんでした。

それでも、自然に入り込むことは元来好きであり、日本各地の景勝地を観光するのが楽しみになりました。そのなかでも、上高地や黒部アルペンルートの景色は感動的で、「こんな綺麗なところが日本にもあるんだ。」とあまりの美しさに感激しました。

◆山登りのルーツ

私のDNAのなかには、もともと山登りが好きになる遺伝子が組み込まれており、スイス旅行とともに覚醒したのかもしれない。

私の山登りのルーツは、子供のころ父に連れて行ってもらった花や山菜採りだと思っています。雪が残る3月の福寿草採りから始まり、フキ、ワラビ、ウド、鈴蘭、山ワサビ、コクワ(サルナシ)、山ブドウなどを晩秋まで、父によく野山に連れて行ってもらいました。今でもそれらの情景が脳裏に焼き付いています。父は私が高校2年の時、52歳という若さで亡くなりましたが、自然の素晴らしさを身を以て教えてく

れ、大変感謝しております。また、私は昆虫や両生類などを飼うことも好きで、オタマジャクシ、ヤゴ、サンショウウオ、ザリガニ、クワガタムシ、キリギリス、コウロギなどを捕りに、よく野山や川に行っていた頃がとても懐かしく感じられます。

◆山登り再開の切っ掛け

山登りを再開した切っ掛けは、スイス旅行です。なぜか子供の頃からスイスに憧れ、海外旅行に行くならスイスと思っていました。そんなチャンスが訪れたのは、1996年の夏でした。海外旅行が趣味の友人と、8月末から9月にかけての7泊8日のツアーに申し込み、参加しました。スイスは期待通り素晴らしく、モンブラン(写真2)、アイガー、メンヒ、ユングフラウ、マッターホルンなど、世界に名立たる4,000m級の山々を間近に見ることができ、感激しっ放しでした。また、ツアーには、2時間ほどのトレッキング(軽登山)が2ヵ所組み込まれていました。トレッキングとはいえ山登りは18年ぶりでしたので、ちょっと不安でしたが、天候にも恵まれ、スイスを思う存分満喫することができました(写真3)。ツアー参加者のなかには、山登りが趣味の人がいて、「日本にもいい山が沢山あるよ。特に北アルプスがいい。日本の山々は木々が生い茂っていたり、小川があったり、溪谷があったり、池塘があったり、お花畑があ



写真2 エギュー・デュ・ミディ展望台にて
中央左のピークがモンブラン。



写真3 メンリヒェンからクライネ・シャイ
デックまでのトレッキングにて

ったり、岩場があったり、実に変化に富んでいて面白いよ。」と教えて頂きました。

日本に帰ってから山登りを再開したくなったのですが、私一人では自信がなく最初に登る山はどのような山が相応しいのか、なかなか山登りをする機会に巡り合えませんでした。私も40歳を超えていたので、体を鍛えておかなければと思い、ウォーキングを始めました。当時職場は大塚にありましたので、休みとなる土曜日の午後などから、大塚を起点に東京駅コース、上野コース、渋谷コースなどを自分で地図を見ながら作成し、最初は1時間位の距離から始め、段々延ばして3時間位歩いても大丈夫になり、体力がついたと思い込み安心していました。

◆山登り再開

スイス旅行より帰ってから、山登りを再開したいという気持ちが、ますます強くなった4年後の2000年10月に、やっとその機会が訪れました。長野県一般検査研修会の講演依頼があった時に、当時「尿沈渣検査法2000」作成に携わった同志でもある長野県丸ノ内病院の白井さんに山登りに行ってみたいことをお話ししました。それから間もなくして白井さんより、「長野赤十字病院の林さんと3人で研修会が終わった翌日の日曜日に乗鞍岳に登りませんか。」という連絡が入り、ついに念願が叶うと思い、嬉しくてたまりませんでした。林さんとも以前から親し

くさせて頂いており、信頼出来る方でしたので、安心して登れると思いき気が楽になりました。

いよいよ念願の日、林さんの車で肩の小屋登山口まで行き、そこから肩の小屋経由で乗鞍岳頂上を目指し、登り始めました。私は写真撮影も目的だったので、カメラ2台を首にぶら下げて、意気揚々と付いて行きました。ウォーキングで体力がついたと思込んでいましたが、すぐに息が上がって気持ち悪くなってしまいました。「こんな筈ではない。」と思うと同時に、やはり山登りは向いていないのかと弱気になり、動けなくなってしまいました。しかし、林さんと白井さんは、「2,500m付近から登り始めたので、軽い高山病に罹ったかもしれない。少し休めば大丈夫。」ととても優しく励ましてくれ、20分近くも待ってくださいました。やっと気分が治まったので、ゆっくり歩き始めましたが、林さんと白井さんには申し訳ないという気持ちでいっぱいでした。ウォーキングで足腰を鍛えたつもりでも、山登りで使う筋肉が違うことに気付いて愕然とし、自信喪失に陥ってしまいました。一步一步でしたが少しずつ高度を上げ、どうにか乗鞍岳頂上の剣ヶ峰に辿り着くことができました(写真4)。頂上からの景色は素晴らしい眺めで、今まで登ってきた稜線が線を描いたように美しく、雲が沸き立ち遠く of 山々が見え隠れしていました(写真5)。確かに今の私にとって、頂上までは辛く苦しい道程でしたが、頂上に辿り着けばこのような素晴らしい景色に出合えることを知り、これまでには無かった次の山に登りたいという感情が生まれ、「私の山人生が始まった」と悟ったような気持ちになりました。

山登りの素晴らしさを気付かせてくれた林さんと白井さんには、心より感謝申し上げます。

乗鞍岳登山を契機に、林さんと白井さんに山登りに誘っていただくようになり、翌年の2001年は白馬三山縦走(猿倉から白馬岳～杓子岳～白馬鎗岳)(写真6)、2002年は上高地から北穂高岳～パノラマコース～屏風岩(写真7)、2003年は表銀座縦走(燕岳～大天井岳～西岳～東鎌尾



写真4 乗鞍岳頂上剣ヶ峰にて
左から白井さん、林さん、私。



写真5 乗鞍岳頂上剣ヶ峰からの眺望



写真6 杓子岳にて
中央が白馬岳。



写真7 屏風の頭にて
左から奥穂高岳、涸沢岳、北穂高岳。

根～槍ヶ岳), 2004 年は八ヶ岳縦走(麦草峠から天狗岳～硫黄岳～赤岳～権現岳～編笠山)と, ますます山登りにのめり込んでいきました。

◆44 年振りのアポイ岳登山

今年 7 月に夏休みを取って北海道の実家に帰っていました。私が暇そうにしていると 2 歳年上の兄が見兼ねて、「靖二、明後日アポイ岳に登らないか」と声をかけてくれました。中学以来 44 年振りで当時悪天候だったことを思い出し、段々登りたい気持ちが強くなってきました。また、兄も高校以来で同じく悪天候であったと聞きました。早速埼玉県上尾の家に連絡し、登山道具一式を翌日に配達される最速便で送ってもらうようお願いしました。実家は羊羹だけを製



写真8 アポイ岳中腹にて
左から私、兄嫁、姪、幼馴染。

造している和菓子屋で、7 月はちょうど忙しい時期にもかかわらず、「その日は 11 時頃には出発



写真9 アポイ岳頂上にて
左から私，姪，兄嫁，兄。

できるように時間を割くから大丈夫。」と言ってくれました。メンバーは兄夫婦，姪の裕美ちゃん，幼馴染みの千賀子ちゃん，私の5名で登ることになりました。登り始めが12時頃になり，雲がでないかと心配でしたが終始天候に恵まれ，素晴らしい景色で海岸線も綺麗に眺めることができ(写真8)，兄も私もやっと長年のリベンジを果たすことができました(写真9)。

◆目指せ百名山

2000年の乗鞍岳登山から今年で13年が経ちましたが，これまで登った山々は百座程度です。百名山(文筆家・登山家 深田久弥の最も著名な山岳随筆；初刊は1964年7月に新潮社から出版)はまだまだ30座程度ですので，これからも楽しみながらゆっくり百名山踏破を目指したいと思っております。

読者の方にはさまざまな趣味をお持ちの方がおいでかと思います。
編集室では本コラムへのご投稿を心よりお待ちしております。